

役者、俳優は、自分の「芝居」「演技」を自分のコントロール下に置かないとダメだと思っている。まあ「芝居」は、例えると「人生」に似ているので、難しいことを言っているとも思うが、目指さなくっては到達は出来ない。自分のコントロール下に置こう。それがあって、演出家が、そこを変えて、って言った時に、はい、とか、いいえ、とか応えられる。自分で意図して演技したことだから。

その目指す方法だが、台本に戻る続ける、のが最良だと思っている。他にも幾つもあると思うが、今回は、台本に戻り続ける、の話。

台本と一字一句正確に演技を求める演出家もいる。稽古の度に、台詞のチェックが細かく入る。それは、大変に面倒だが、素晴らしい姿勢だと思う。でも、僕は違うのだった。僕は、台本の通りが正解にはしていない演出を採用してきている。演出の意図が台詞を変えることがあるし、俳優の意図や経験が、台本に新たな発見をもたらすことがあり、変更が成されることもある。

だが、稽古で台本が手から離れ、意図せず勝手にだんだん言い方が変化してしまうことは避けたい。それは、別の言葉で言うなら、間違っている、ということだからだ。台詞、間違ってるよ、なのだ。もしも同じ言い方、表現を採用する場合にでも、勝手に自分で気づかずにそれをしてしまうことと、考えて、意図をもってそれをするの間には、大きな隔たりがある。

演技とは、計算だ、上記にて、人生と似ている、と書いたのは、計算通りにいかないのが人生であり、演技だからだ。でも、それで人生を諦めたら成功しないように、演技の成功にも諦めは厳禁だ。人生なら自分が不幸になるだけで済むが、演技は、それを観ている観客を巻き込むことになるから。

まあ、精神論的なことはいいだろう。台詞が入った、台本なんか見なくっても芝居は出来る、状態から、台本に戻る、戻り続ける、何度も、って作業が、自分の芝居が只の間違いで構成されているのではなく、自分の意志による選択に昇華させる。コントロール下に置くことにつながって行く。

そして、それが、その俳優の実力になっていく。経験を力にするには、知が必要だ。キチンと、台本に戻り続ける、の話でした。

長堀博士、記。